

〔講座〕

江戸の腑分

石 出 猛 史

(1997年11月17日受理)

要 旨

江戸時代に行われた「腑分」は日本の近代医学の魁である。『蔵志』を著した山脇東洋、『解体新書』を著した前野良沢・杉田玄白らによる腑分は、良く知られている。しかし多くの腑分については、ほとんど知られていない。文久元年(1861)幕府種痘所は、医学生解剖教育のために、腑分を種痘所で定期的に行えるように、町奉行所に働かした。この時は小伝馬町牢屋敷で腑分が行われた。明治に入っても猶、刑死体が解剖実習に供された。

Key words: 清亮寺, 小塚原回向院, 小伝馬町牢屋敷, 幕府種痘所解剖科

はじめに

本邦における近代西洋医学の教育と研究は、「腑分」にはじまったといっても過言ではない。旧幕府時代、江戸で何回位腑分が行われたものであろうか。故小川鼎三氏の著書によると、記録が明かなものとして、明和8年(1771)の杉田玄白ら、文化12年(1815)の高須松斎ら、文政2年(1819)の南小柿寧一、安政6年(1859)の幕府種痘所によるものの4回が紹介されている[1]。

しかし『蘭学事始』によると[2], 玄白らが腑分を行う以前に、幕府医官岡田養仙(1722-1797), 小石川養生所医員藤本立泉(1703-1769)らは、既に7, 8体の腑分を行っていることが指摘されている。玄白よりは後の時代になるが、南小柿寧一は40数回の腑分を経験しており、小川氏はその場所を小塚原であろうと推定されている[1]。

旧幕引継文書中にある、小塚原の小屋頭市兵衛から提出された『覚』によると、文政3年(1820)8月町医中川意仁が腑分を行っている。この腑分については一般には知られていない。

江戸時代最初の腑分を行ったのは、山脇東洋

(1705-1762)であるというのが定説となっている。宝暦4年(1754)閏2月7日京都で行われた。この腑分は、幕府の直轄地である京都の所司代を勤めていた、若狭小浜藩々主酒井忠用によって許可されたものである。小川氏はこの腑分の許可を酒井忠用の大英断であるとされているが、果して忠用が独断で許可したものであろうか。また東洋が行った腑分は、江戸時代に最初に行われたものであったのだろうか。

本稿では幕末から明治初頭にかけて行われた腑分について、余り知られていない事柄を紹介したい。

須賀川医学校

図1の写真は、最近週刊誌のグラビアでも紹介されたものであるが、明治10年(1877)福島県立須賀川医学校(福島県立医科大学の前身)で、解剖が行われた時のものである。この年の1月鹿児島では西郷党が蜂起し、西南の役がおこっている。須賀川医学校では、同7年3月渋谷正信教授の指導のもとに、医学生による最初の解剖が行われて



図1. 明治10年須賀川医学校における解剖実習

ストライプハウス美術館
(東京都港区六本木5-10-33) 所蔵.

いる[3]。写真中央の一人だけ洋装の人物が渋谷教授であろう。

襷掛けの青年達が医学生と思われる。ここでも解剖に付されたのは、刑死者あるいは病死した収監者である。この頃の処刑は斬首と絞首が行われている。写真の遺体には頭部がついており、頸部も伸びていないので、おそらく病死したものであろう。頭部・下肢のるいそうも著しく、極めて栄養状態が悪かったことが推定される。おそらく幕末の江戸における腑分もこのようなものであったのだろう。この学校の第一回卒業生に、内務省衛生局長・初代満鉄総裁・内相・外相・東京市長などを歴任した後藤新平(1857-1929)がいる[4]。

清 亮 寺

東京都足立区日の出町(北千住)にある。荒川を挟んだ対岸には、時折新聞誌面を賑わせる東京拘置所(旧小菅刑務所)がある。清亮寺は徳川光圀に関連した“槍かけ松”と、京都帝国大学初代国史学科教授内田銀蔵夫妻の墓があることで知られている[5]。

明治3年(1870)8月から翌4年11月にかけて、ここで解剖が行われた。この時の供養碑が「解剖人墓」として残されている。明治5年に建立され現在の墓石は2代目である(図2)。

碑面には次のように刻まれている。「明治初年日本医学のあけぼのの時代明治三年八月当山で解

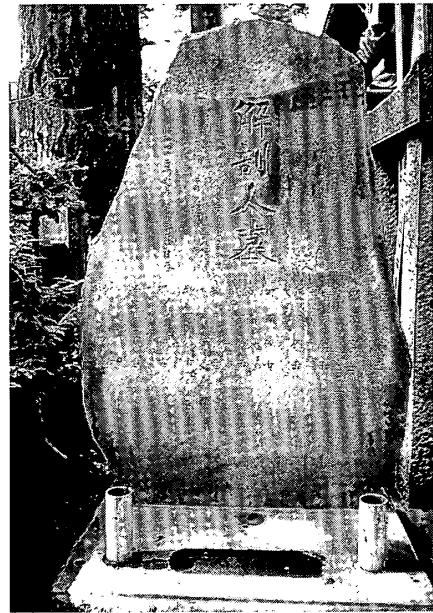


図2. 清亮寺の解剖人墓

旧水戸街道に面した山門を潜ると本堂の左手前にある。解剖された囚人の戎名には、全て「刃」の字が刻まれている。

剖が行われました 仏をふわけさせる者などだれもない頃でした 被解剖者はすべて死罪人でした 執刀は福井順道が一人 大久保適齊が九人 亜米利加人ヤンハンが一人 いずれも日本医学のパイオニアたちでした それら死罪人の霊をとむらうべく墓を明治五年二月に建てましたが 破損してききましたので ここに新しく石碑を建立しました」

明治3年の東京の実態は「江戸」である。清亮寺で腑分が行われた理由は判っていない。瀧善成氏の調査によると、解剖に付された囚人の名が、明治3・4年の小塚原回向院総回向帳に記されているということから[6]、回向院に埋葬されたものであろう。この明治3年という年は、解剖教育に付するために、刑死体が大学東校(東京大学医学部の前身)に送られるようになった年でもある。

清亮寺で解剖を行った医師のうち、福井順道についてはほとんど知られていない。米国人医師ヤンハンの在日期間は明治3年から同9年まで。評判の良い医師だったので、ドイツ人医師が大学東校に赴任するまでの間、大学東校で雇う動きもあったといわれている。明治6年から3年間愛知県立病院に奉職し、しばしば解剖を行い供覧したと伝えられている[7]。後藤新平は明治9年9月「愛

知県病院三等軍医申付候事」という辞令を下付されている。後藤新平とヤンハンは面識があったものかどうか。

大久保適斎は天保11年（1840）江戸小石川で生まれた。蘭医塩原春斎の門下で学んだ後、華岡塾・緒方洪庵の適塾・大学東校にも藉を置いた。著書に『鍼治新書』がある。明治3年小菅県立病院副院長、同4年には千住小塚原の梅毒病院々長を兼ねている。清亮寺における解剖には、適斎のこのような千住との関りも関係していたのかもしれない[7]。

小伝馬町牢屋敷

俗には「伝馬町（てんまちょう）ノ牢屋」ともいう[8]。江戸幕府の未決囚収監所である。慶長年間（1596-1614）に江戸城常盤橋門外から移転し、明治8年（1875）市ヶ谷に新たに刑務所が設けられるまで、旧日本橋小伝馬上町にあった。現在の地下鉄日比谷線小伝馬町駅の地上出入口一帯にあたる。現在は大安楽寺・身延山別院・区立日本橋小学校・十思公園などがある[図3]。

嘗旧幕時代、ここには高野長英・吉田松陰・橋本左内らの政治犯をはじめ、河内山宗俊・鼠小僧・

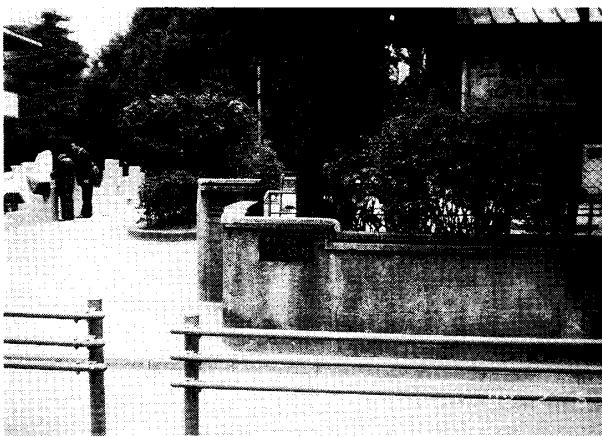


図3. 十思公園（小伝馬町牢屋敷跡）

左手奥に中央区立日本橋小学校（旧十思小学校）がある。この一帯がかつて牢舎があった場所である。左端に見える建物は、「石町（こくちょう）時の鐘」である。江戸で最初の時報を告げる鐘である。日本橋本石町（現在の日本橋室町）にあったものを移築したものである。江戸参府の折、長崎のオランダ商館員の常宿となったのが、薬種商兼宿屋の「長崎屋」である。長崎屋はこの本石町にあった。

国定忠治など、今日でも芝居の主人公になるような人物が多数入牢していた。

江戸で腑分に用いられた刑死体はここで斬首されたものである。磔刑に処せられた刑死体が、腑分に供されたか否かは判らない。管見した限りでは、腑分を記録した図では、いずれも頭部を欠いている。旧幕引継文書によると、牢屋敷は幕末には医師からの腑分願いの窓口にもなっている[9]。文久元年（1861）には、幕府医学所からの要請で、斬首された遺体を牢屋敷から定期的に提供するよう許可が出された[10]。

牢屋敷が明治政府に引継がれてからも、系統解剖用の遺体はここから供されている。明治3年10月大学東校から明治政府に同様の願が出され、20日付で許可が出された[11]。これは石黒忠恵と田口和美（東京大学初代解剖学教授）の奔走によるものである[12]。

但遺体の下げ渡しについては、既に同じ年の8月大学東校に対して、引き取り手がない刑死者の解剖許可が出されたという記述もみられる[13]。12月末までに52体が送られた。

この前年の明治2年12月には、元佐倉藩一等医師佐藤尚中（初代舜海）が佐倉順天堂から招かれて大学大博士となり、大学東校の最高責任者になっている。翌3年3月尚中は大学東校の助教・得業生と共に、収監中の病囚の診察にあたることを命ぜられた[13]。石黒忠恵は触れていないが、この件も刑屍下げ渡しを促した可能性がある。

千葉寒川未決監（現千葉刑務所）でも、明治8年2月から千葉病院（本学の前身）の医師1名が宿直をするようになった[13]。猶旧幕時代でも小伝馬町の牢屋敷には、常勤医として本道（内科）2名・外科1名（隔日出勤）がおり、欧州の監獄と比較しても制度としては整っていた[14]。

明治7年（1874）大学東校に入学した森鷗外の回顧譚がある[15]。鷗外は明治10年後期に解剖実習に入っている。この頃 Doenitz という教師が解剖学を教えていたとあるが、この人物についてはあまり知られていない。

鷗外によると「(屍体は) 伝馬町牢屋から来た。」「(首の) 切口は多く斜め、時に上にそれて下顎に切りかけ、または下にはずれて肩口に切りこみ、勢い余って膝頭にまで刀痕を残したのもあった。」

とある。これが江戸時代腑分に供された遺体の様子である。

ここで鷗外が伝馬町牢屋と述べているのは間違いである。前述のように、明治8年に伝馬町の牢屋は廃止され、病囚監になっているからである。それ程強く腑分と伝馬町牢屋敷とが結びつけて考えられていたのだろう。

小塚原（骨ヶ原）

江戸時代小塚原の刑場は現在の荒川区南千住にあった。もう一つの代表的な刑場である鈴ヶ森は、現在の品川区南大井である。どちらも幕府管轄下の火刑・磔刑・梟首が行われたが、斬首刑を行う場所ではなかった。腑分が行われたのは小塚原で、鈴ヶ森で行われたという記録は見出されていない。

『蘭学事始』には、刑場を管理している老人が馴れた手付で、腑分を行っていく様子が描かれている[2]。小塚原の刑場は「非人支配頭千住の市兵衛」の縄張りで、腑分を行った老人は市兵衛か配下の者であろう。当時を偲ばせる遺構として小塚原回向院があり、ここには前野良沢・杉田玄白らの腑分を記念した「観臓記念碑」のrelievoが展示されている（図4）。

回向院と旧日光・奥州道中（通称“コッ通り”）に並んで延命寺がある。この寺は元来回向院の一部であった。ここには、寛保元年（1741）刑死者の霊を供養するために建立された「延命地蔵」が

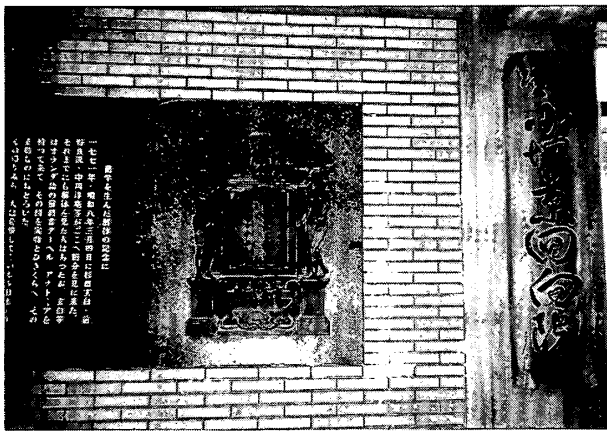


図4. 小塚原回向院の観臓記念碑

現在の記念碑は3代目である。昭和49年10月解体新書出版200年にあたる年に、日本医史学会・日本医学会・日本医師会によって建立された。

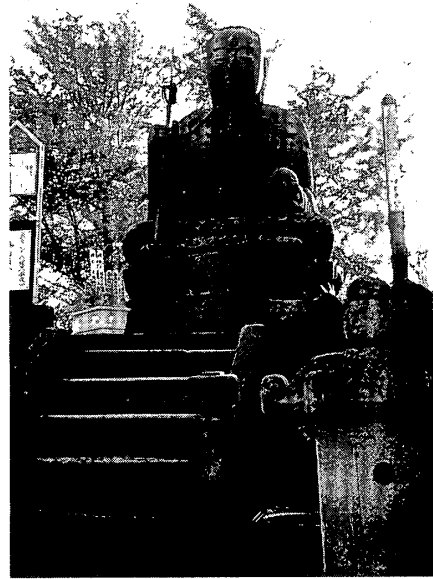


図5. 延命寺の延命地蔵

通称「首切地蔵」ともいう。元はJR貨物線の南側にあった。寺名は延命地蔵からとったものである。

ある（図5）。現在は周りを、地下鉄日比谷線、JR常磐線・貨物線に挟まれて窮屈そうである。寺の説明によると、刑場があった当時、雨が降ると埋葬された刑死体が露出し、それを野犬が喰いちぎる光景がみられ、阿鼻叫喚を極めたものであったという。

杉田玄白は小塚原で腑分にあたった老人について、「えたの虎松の祖父で齢90歳」「彼奴は若きより腑分は度々手につけ、数人を解きたりと語りぬ」と記している。当時の年齢はあてにならないことがあるが、かなり以前から腑分を手がけていたことがわかる。

山脇東洋からの「腑分願」に対して、京都所司代酒井忠用は小浜藩々主としてではなく、幕府の役人として許可を出している。東洋が行った腑分が公に最初のものであったとしたら、先例がない事を行うことになる。先例がないことを行うにあたって、酒井忠用が独断で許可したとは考えにくい。おそらく幕閣に「伺」をたてたものと考えられる。しかも將軍の直裁になった可能性が高い。

ところで、東洋による腑分が行われた宝暦4年当時の將軍が問題である。当時の9代將軍家重については、「言語不明瞭にして病気がちであり、政務は重臣に任せていた」ことが知られている[16]。この宝暦4年当時、佐倉藩々主堀田相模守

正亮（後期堀田氏）は幕府老中を勤めている。

これらを勘案すると、最初に幕府から腑分の許可が出された時期として、①宝暦4年より以前であるが、それほど遠くなく②洋学に対する開放策がとられ③将軍による親政が行われていた時期が考えられる。これに該当する時期として、家重の父吉宗が将軍であった享保元年（1716）—延享2年（1745）がある。

吉宗は強力な将軍親政を行ったのみならず、洋学に対して開放政策をとったことでも知られている。享保4年（1719）には西川如見に洋書を講義させた。また慶長14年（1609）に始った、長崎のオランダ商館長の江戸参府も毎年行われていた。

この時に同行したオランダ商館医として、Willem Wagemans（享保2年）、Willem Katelaar（同8・9年）、David Drinkman（同12年）、Hendrik Thomson（同17年）らの名が残されており[17]、この時に幕府の医師らが彼らの逗留先を訪れ、様々な質問をしたことも知られている。

このような背景を考えると、将軍吉宗の時代に、既に最初の腑分が行われていたことがうかがわれる。

腑分を許可された医師たちは、その経費を負担しなくてはならなかった。小塚原小屋頭市兵衛が提出した書面によると、文政2年当時従来からの仕来りとして6両2分とあり、これは小屋頭市兵衛・長兵衛、回向院、牢屋敷担当の町奉行所与力・同心、牢屋敷の職員に対する心付けである。この他に、実際の作業にあたる人足らにも手間賃が支払われている。

文政2年というのは、前述の南小柿寧一が腑分を行った時期になる。この費用については医師から負担が大きいという苦情が出たために、翌文政3年には1両3分に引き下げられている。支払いは市兵衛と長兵衛を除いては、実際に作業にあたる人足と道具代に限られており、回向院・町奉行所役人・牢屋敷役人に対する謝礼は廃止されている[10]。杉田玄白が「獣畜を解く」[2]と記しているのは、このような事情も関係していたのかもしれない。

猶「千住の市兵衛」と「小屋頭市兵衛」は同一人物であり、小塚原処刑場の支配頭である。「小屋頭長兵衛」は俗に「谷の者長兵衛」とも呼ばれ、

牢屋敷外の土手下に起居する非人の支配頭で、牢屋敷の雑用に従事した。

腑分が行われたのは小塚原のどこであろうか。『蘭学事始』によると刑場の中で行われたようである。しかし文久元年に種頭所頭取大槻俊斎（斎は中国の字で斎に同じ）から提出された書付には、「小塚原回向院於下屋敷」という記述もみられる。安政4年に牢屋敷から出された文書では、「浅草御仕置場續回向院江仮囲取立」とあるので、どちらともとれる場所である。

腑分に際しては、牢屋敷から鍵役（牢屋敷の次席）1名と両町奉行所から牢屋見廻同心1名ずつが、小塚原に出役して監督した。

牢屋敷の腑分

文久元年の師走、小伝馬町牢屋敷で腑分が行われた（図6）。おそらく医史上知られていない出来事である。

萬延元年（1860）1月新見正興を正使とする幕府使節が渡米し、3月には江戸城桜田門外に於て、登城途中の大老井伊直弼が水戸藩浪士によって暗殺された。同じ年の10月14日お玉が池種痘所が幕府に移管されて、官立の種痘所となった。

翌文久元年3月には種痘所の職制も定められた。それから間もない同年8月、種痘所頭取大槻俊斎から、月番の北町奉行所に宛てて、『醫術解剖之義ニ付奉願候書付』という一通の書状が提出されている。学術用語としての「解剖」という語が初めて使われた文書かもしれない。

この願書で大槻俊斎は、①毎年、処刑された男女を一体ずつ、もしくは男2体の腑分を許可して欲しい、②腑分を種痘所で行わせて欲しい、という内容の要求をしている。この文書は町奉行所から囚獄に回送された。

これに対して、囚獄石出帯刀と牢屋見廻与力後藤斧次郎・徳岡政左衛門の連名で、主として管理上の問題から、種痘所における腑分の件についてはねつけている。但妥協案として、牢屋敷内の処刑場における腑分を提案している。

一体に江戸時代の石出帯刀（たてわき）とは、それ以前の石出帯刀とは異り、即幕府の囚獄（伝馬町牢屋敷の長官）を意味する。旗本大御番（徳

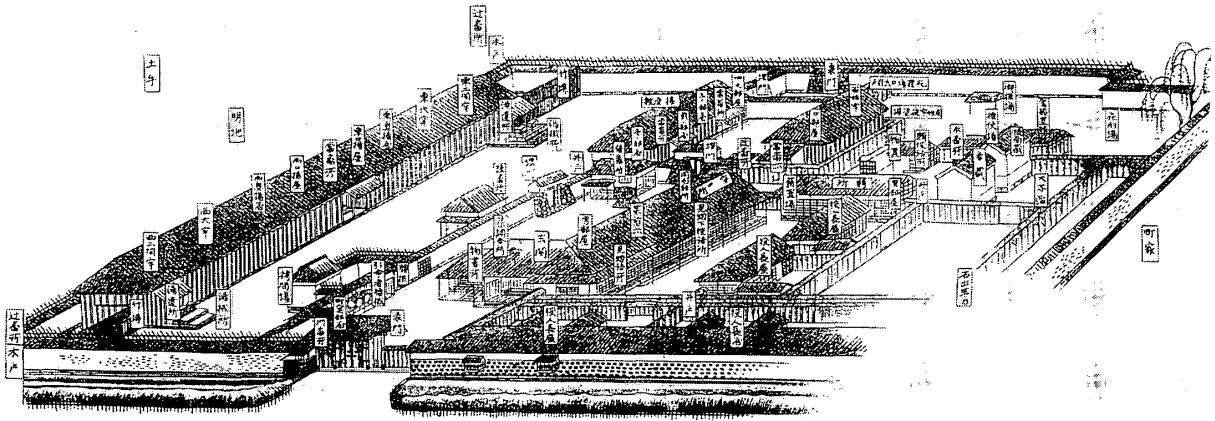


図6. 小伝馬町牢屋敷鳥瞰図（黒崎修斎画）

『風俗画報』（明治33年）に掲載されたものである。牢屋敷図は牢屋敷の普譜願に添付された図をはじめ、牢屋敷に収監されていた吉田松陰・佐原の俠客本郷喜三郎が残した図など、数点が知られている。これらの牢屋敷図のうち、牢屋敷見廻を勤めた町奉行所与力蜂屋新五郎が著した『徳隣厳秘録』（文化11年）中の「牢屋敷平面図」が最も有名であろう。牢屋敷の右手奥の処刑場がある空地で腑分が行われた。

川家康の親衛隊）の出身で、大阪の役・関東の盗賊退治の軍功によって囚獄に任ぜられた。武官中の武官である（『続視聴草』）。

幕末には、「一小天地に唯我独尊を謡いつつ」などと揶揄されたりもしているが、歴代の石出帯刀のうちには石出吉深（1615-1689、常軒と号する）のように、明暦3年（1657）正月の大火（「振袖火事」ともいう）に際して、独断で収監者の「切放」を行い（火急の際の処置として、現行の監獄法22条に引継れている）[18]、当時の江戸の「四大連歌師」の一人に数えられ、また『源氏物語』の研究者として、国文学史上に名を残す人物も出ている[19,20]。

文久元年当時の帯刀は、旗本渡辺房次郎の実弟で縫之助、先代の石出帯刀常救の養子である。歴代帯刀のうちでも能吏に入る。

町奉行から種痘所にあてた返事は、①腑分の回数は希望通に許可する、②但場所については、牢屋敷の処刑場で行ってはどうか（「牢屋敷処刑場において解剖為致候方可然哉」というものであった。

この時の町奉行の裁可を、緒方富雄氏は「処刑場であるから、従来通り腑分は小塚原回向院で行われることになった」[21]と解釈されており、小川氏も幕府は「いままでのように刑場でやれ」と答えたと紹介されている[11]。

その後更に具体的な手続として、種痘所の医師が牢屋敷内の解剖を行う場所の下見を行っている（『牢屋敷内解剖場所為見置候義申上候書付』）。また種痘所から、腑分の出席者の名簿が提出された。総勢100名余りである。この名簿から、当時の種痘所には「解剖科」があり、坪井信道・高須松亭・

野中玄英がその会頭を勤めていたことが判る。

江戸時代の医師は僧侶と同様の扱いを受けていた。しかし種痘所の医師達にこのような意識は薄かったであろう。これらの一連の文書を読み解く時、当時の西洋医学者の気概がうかがわれる。

この牢屋敷における腑分をめぐる詳細については後日に譲る。

SUMMARY

Necropsy took the lead of modern Japanese medicine in the Edo era. The necropsies performed by Tohyo Yamawaki, who wrote "Zohshi", and by Rhyotaku Maeno, Genpaku Sugita and others who translated "Ontleedkundige Tafelen" into Japanese, are well known, while most other necropsies performed in the Edo era are little known. In Bunkyo the first (1821), the medical school of the Tokugawa Shogunate asked the government of Edo city for permission to perform necropsies regularly in the medical school to educate medical students. But it was not permitted. Then necropsy was subsequently performed in Kodenma-cho Prison. In the Meiji era, Bodies of executed individuals still used at that time to teach anatomy in medical schools.

文 献

- 小川鼎三：明治前日本解剖学史，明治前日本医学史 第一巻，日本学士院日本科学史刊行会編，pp. 52-249，増訂復刻版，日本古医学資料センター，東京，1978.
- 杉田玄白：上の巻，蘭学事始，緒方富雄校註，pp. 11-41，岩波書店，東京，1959.
- 小泉衡平：須賀川の先駆者たち，医界風土記 北海道・東北篇，酒井シヅ監修，pp.173-175，思文閣出版，京都，1994.
- 小泉衡平：須賀川医学校の卒業生と後藤新平，医界風土記 北海道・東北篇，酒井シヅ監修，pp. 183-185，思文閣出版，1994.
- 足立史談会：千住宿めぐり(2)，足立区史跡散歩，pp.61-83，学生社，東京，1978.
- 羽田栄太，磯 周二：清亮寺，足立区文化財調査報告書 No. 15，足立区教育委員会編，pp.98-116，東京，1981.
- 大岡久雄：解剖人墓，医界風土記 関東申信越篇，pp.179-181，酒井シヅ監修，思文閣出版，京都，1994.
- 石出猛史，石出聡史：小伝馬町牢屋舗(上)，刑政，106：46-51，1995.
- 辻敬助：腑分，日本近世行刑史稿 上，刑務協会編，pp.662-675，矯正協会，東京，1943.
- 安政四年腑分自分仕置稽古様留帳 遠島者並佐州吉高外御仕置引渡ノモノ其外留 御仕置仕方遠国奉行其外ヨリノ問合 切腹留 御様並山田朝右衛門願書留(旧東京監獄石川島分署写本)
- 小川鼎三：十九世紀半ば以後，医学の歴史，pp. 163-229，中央公論社，東京，1964.
- 石黒忠恵：明治初期の解剖学，懐旧九十年，pp. 236-242，岩波書店，1983.
- 辻敬助：監獄記事並關係事項，日本近世行刑史稿 下，刑務協会編，pp.1-278，矯正協会，東京，1943.
- Howard J：十八世紀ヨーロッパ監獄事情，川北稔・森本真美訳，岩波書店，東京，1994.
- 森 於菟：鷗外と解剖，父親としての森鷗外，pp. 63-67，筑摩書房，東京，1969.
- 鈴木 尚：歯ぎしりに言語障害があった美男子将軍ー9代徳川家重一，骨は語る 徳川将軍・大名家の人びと，pp.49-58，東京大学出版会，東京，1985.
- 古賀十二郎：享保時代に江戸参禮をなせる紅毛醫師，西洋醫術傳來史，pp.154-158，形成社，東京，1972.
- 穂積陳重：石出帯刀の縦囚，法窓夜話，pp.276-278，岩波書店，東京，1980.
- 國學者傳記集成第一巻，上田萬年監修，名著刑行会，東京，1967.
- 瀧 善成：石出常軒の事績とその生涯，足立区文化財調査報告書 No.15，足立区教育委員会編，pp. 3-44，東京，1981.
- 緒方富雄：お玉ヶ池種痘所の誕生・西洋医学所・医学所，東京大学医学部百年史，東京大学医学部百年史編集委員会編，pp.43-79，東京大学出版会，東京，1967.